

KONAN UNIVERSITY

シンポジウム企画趣旨（「現代人と母性」 - 2000年度 学術フロンティア・シンポジウム報告）

著者	高石 恭子
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	2
ページ	5-7
発行年	2001-07-01
URL	http://doi.org/10.14990/00002857

シンポジウム企画趣旨

司会 高石 恭子

平成十年度より始まった学術フロンティア事業においては、臨床心理学と現代思想の二領域を柱に、毎年学際的な研究が活発に行われている。そのなかで、平成十二年度は人文科学研究所の松尾恒子先生を代表として、フロンティア共同研究プロジェクト参加研究員を中心に、「子育て研究会」を組織し、子育て支援をめぐる研究と大規模な調査研究が進められた。阪神間の乳幼児をもつ母親を対象に施行した「子育て環境と子どもに対する意識調査」の報告書については、本書巻末に資料として掲載されているので、別途参照していただきたい。

昨今はメディアで取り上げられないほど頻繁に、親による子どもの虐待・殺傷事件や、青少年による突発的凶悪犯罪が起こり、私たちの危機感を募らせている。その背景には、少子化、核家族化、地域社会の消失などさまざまな時代の変化が指摘されるが、ともすればその論調は、母親の未熟、父親の不在、といった近視眼的な原因追究となつて、さらに個々の親たちを追いつめる結果を招く危険をはらんでいる。子育て研究会における議論の焦点は、そういった原因追究ではなく、どのような複合的要因が重なり合ったときに親

(主として母親)が育児を苦痛に感じ、また、「線を越えて」わが子を虐待するに及ぶのだろうかということ、それに対して心理臨床の観点から、不幸な事件を今後増やさないためにもどのような支援が可能で望ましいのか、を模索することに在った。

乳幼児やその母親、あるいは被虐待児と直接関わっている現場の医師、助産婦、臨床心理士などの方々を招いて研究会を重ねるうち、母性の絆 すなわち人間の基本的信頼感の源 を形成するにあたって、妊娠から赤ん坊の誕生後しばらくまでの母子をどのようにケアするかがクリティカル(危機的、決定的、そして臨界)であるという、周産期の問題が浮上した。戦後の高度成長時代に、医療の進歩と反比例して急速に失われた自然なものの継承の営みを、現代的に再生



することの必要性を、研究会のメンバーは改めて考えさせられたのである。

また、調査研究の結果から見てきたのは、乳幼児をもつ少なからぬ母親が、「良き母親」であろうとしてありえず、母性的にならうとしてなりえないことに葛藤し、ストレスを抱えている現状であった。そもそも反自然である文明生活を送っている私たち現代人にとって、母性とは何なのか、母親であることとどのような関係性において理解すべきなのか。それらを自明のこととして扱うのではなく、個々の母親から少し離れて遠視的に見渡してみる必要もありそうに思われた。

そこで、第二回のシンポジウムは、本年度の子育て支援に関する研究の総まとめとして、「現代人と母性」という大きなテーマを掲げ、まず基調講演を日本文化研究センター所長・京都大学名誉教授の河合隼雄先生にお願いした。河合先生は、『母性社会日本の病理』（中公叢書、一九七六年）をはじめ、母性と日本人・日本文化との関連を、早くから論じて来られた草分け的存在である。過去・現在および東西の文化を相対的に捉える軸上で、現代の日本人である私たちは今どこに位置しているのか、理解の枠組を提示していただけるのではないかと期待した。さらに、先生のご専門である分析心理学の立場からも、象徴的次元における母性（あるいは母性性）とは何か、わかりやすく語っていただけるのではないかと考えた。

次に、シンポジウムとしては、母性の誕生する原点としての「周産期」に焦点を絞り、「周産期における母性の育み」と

題して、お産・育児支援の現場の最先端で活躍する専門家にそれぞれの取り組みを報告していただくことにした。分野は、小児科医療（橋本武夫先生）、産科医療（岡村博行先生）、助産（岡野真紀代先生）、育児相談（川谷和子先生）の四領域である。シンポジストの方々は、本学の松尾恒子先生を含め、これまでにも研究実践において相互に交流を重ねてこられた間柄と伺っている。

橋本先生には、「大地は母なり」という演題で、新生児医療から見えてきた母乳育児と母性との関係を、岡村先生には「母性を育む」という演題で、「ご自身が推進しておられるソフロロジー式分娩教育を、また岡野真紀代先生には「母子の絆を深めるために自然分娩は大切」という演題で、「ご自身が勤務先の「お産の家」で実践しておられるユニークな助産の試みを、最後に川谷先生には「母子カプルの始まりには、温かい支援を」という演題で、母乳育児支援活動から得られた知見を、お話しいただくようお願いした。いずれの先生方も、わが国ではその領域におけるパイオニアである。各二十分という分担時間では尽くせない、「語りたい」熱いものをもっていらっしやるのが、壇上からひしひしと伝わってきた。各ご発表の内容は、本紀要に改めて原稿をまとめていただいたものを収録してある。寄稿に対し、御礼申し上げます。

それから、少し欲張りなコーディネートだったかもしれないが、指定討論として、医療人類学の領域から小林昌廣先生をお願いし、また指定討論およびシンポジウム全体の総括を、臨床心理学の松尾恒子先生にお願いした。シンポジウムが、

やはり演者の専門分野の性質上、これから子を産もうとしているか、あるいは子を産んだ、具体的な「母親」のもつ母性を議論の対象に据えたものであるため、もう一度、基調講演での問題提起に呼応するかたちで、指定討論において思い切った相対化と普遍化がなされることを目論んだ。小林先生は、最近はむしろ舞台芸術のほうに関心を移されているそうであるが、フロンティア共同研究プロジェクトの参加研究員であったご縁で、無理をお願いした。

最後になるが、基調講演を含め、本シンポジウムで壇上が上がってくださった先生方、フロアでご発言くださった参加者の方々、それから事前の研究会で貴重な資料をご提示くださった先生方に、改めて御礼を申し上げます。また、本年度は甲南大学開学五十周年にあたるということで、シンポジウム開催のご挨拶をくださった、吉沢英成学長にも感謝の意を表したい。